

司公良子

検査庵  
だより  
03

# 住職挨拶



検校庵 住職 鈴木 恵道

曹洞宗の御詠歌、梅花流の特派師範を拝命して以来二十年以上の期間、全国を巡り御詠歌による布教という任務を務めさせて頂きました。

その任務を通して多くの出会いがあり、御詠歌を通して仏の教えを共に学んだ同志だからこそ味わうことの出来る喜びは特別なものがありますし、講習会を通して共感頂いた方々とのご縁は特派師範を引退した今でも変わらずに続いております。

とはいえ、検校庵を留守にすることも多く、檀信徒の皆様には多

くのご不便やご迷惑をお掛けした事と思えます。

改めてお詫び申し上げますと共に、この期間に得た仏縁と悦びを檀信徒の皆さまにお届けさせて頂けますよう精進して参ります。

例年ですと御詠歌を通して全国を布教する仲間を講師として迎えて、新盆を迎えるご家族やご先祖さまを偲ぶ皆さまにお話を頂いておりましたが、法話の時間を削るという選択肢しかみつからず思案した結果辿り着いたのが「検校庵だより」発行の理由でした。

昨年に引き続き飯島恵道師にコラムを書いて頂きましたので、お盆の期間にご家族皆さままでお読み下されば幸いです。

最近ではワクチン接種を終えたという話を伺う機会が増えてきま

したが、接種したことで僅かでも不安が取り除かれたのかお話し下さる方々の表情が明るく感じます。私自身は注射が苦手なので出来れば受けたくありません。

それでも、ご法事やご葬儀などの場に赴く僧侶としての立場で考え直すときに一番怖いことは、自身自身の感染よりも私に関わった方々に感染してしまうかもしれない事です。

私が接する機会のある全ての人を守りたいと願いますので、順番が回り次第喜んでワクチン接種する予定です。

ワクチン接種者が増えることで、世界中の人々の不安が少しずつでも解消されることを願いますと共に、ご縁のある全ての方々に、検校尊者のご加護がありますことを祈念申し上げます。

**SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS**  
私たち一人ひとりの行動が、未来に繋がる

3 すべての人に健康と福祉を



# 「尊い同事行」

飯島 恵道

コロナ禍で迎える二度目の夏。ワクチン接種も進んでいないものの、コロナ疲れを感じておられる方も多いのではないのでしょうか。

人間社会はコロナで大変な思いをしておりますが、私たちが取り巻く自然は、いつもと変わらぬ四季折々の姿を見せてくれています。

その美しさと、自然の偉大さにあらためて感動し、「人間という存在は小さくて、弱いものだなあ」などと思ったり。

コロナ禍での看取り、死別。「コロナさえなければ、ずっとそばで付き添えたのに」「コロナさえなければ、もっと沢山の方をご葬儀に呼べたのに」、この時期に大切な方を亡くされたご家族は、口々にそう仰います。

確かに、コロナ禍での看取り・死別は、今までとは比べようがないほどつらいものとなっています。

私が主催する市民団体「ケア集団ハートビート」では、定期的に死別の悲嘆を分かち合う「わかちあいの会」を開催しておりますが、強い無念の思いを口にされる方が今までよりも多いように感じます。

わかちあいの会にご参加くださったKさんが、「自分はコロナ禍で大切な家族を看取り、本当に大変でつらい思いをした。自分と同じように深い悲しみに暮れている方も多いのではないかと思う。もしかしたら、つらい思いを吐き出せずに

いる人も多いのではないだろうか。だからこそ、なんらかの形で、私のように深く悲しみを抱えたその人の力になれたらと思っている」と仰り、当団体のスタッフとして活動してくださることになりました。

修証義しゅしょうぎというお経の第四章に、菩提薩埵ぼだいざつたししょうぼう四摂法のご説示があります。菩薩が修行すべき「布施・愛語・利行・同事」の四つの徳目を指します。

Kさんは、ご自身が大変な思いをしたことを通して、自分のことだけではなく、同じようにつらい思いをしておられる方に思いを馳せ、お役に立ちたいと行動を起こされました。これはまさに、「他者の痛みを自分のこととうけとめ、他者の立場にたって考える同事のお姿」といえます。布施・愛語・利行・同事、いずれも他者に対してサポートの手を差し伸べる思いであり行為であります。

Kさんは、同事行を発端として、菩提薩埵四摂法の道を歩き始められた、私はそんな風には感じました。

「人間は小さくて弱い」だからこそ、互いに支えあい、助け合うことができるのだと思います。

コロナ禍だからこそ、皆が大変な思いをしているからこそ、今まで以上に互いが互いを思いあい、助け合いながら、コロナ明けを迎えたいものと思います。

飯島 恵道 (いじま けいどう)

長野県松本市薬王山東昌寺住職 NPO 法人アルウィズ「デイホーム楓」看護師

保護司(松本地区保護司会) 教諭師(有明高原寮) 任意市民団体「ケア集団ハートビート」代表。

ケア集団ハートビートでは、生老病死のトータルケアの学びと実践を核とした活動をしており、現在は死別悲嘆者へのケアが当たり前にある地域の実現をめざし活動を展開中。前職看護師(諏訪中央病院、内科・訪問看護・緩和ケア病棟に勤務)。

病院・地域での看護師としての活動を、自坊での活動に活かす道筋を見極めるため、信州大学大学院経済・社会政策科学研究科地域社会イニシアティブコース(修士課程)にて学び、「死別悲嘆者へのケアの考察～第三人称親密圏からの寄り添い～」を執筆。

## 寄稿者紹介

# 共に生きる

藤田 清隆

## 灰頭土面

【灰にまみれ、泥だらけになって働く。人が嫌がることも厭わず取り組む、その姿こそが美しい。】

灰をかぶり、顔は泥だらけになりながら、悩める人々を救済するために走り回ること。たとえお悟りを開いたからといって、坐禅を組んで法を説いていればよいというわけではありません。本当に苦しむ人を救うためには、自らが出向いて行ってその苦しみを共にし、一緒に歩んで行くことで、初めてその人の気持ちも知るところとなり、真に救うことができるのである、という禅語です。

令和元年十月に千曲川が氾濫した台風十九号の被災以来、瓦礫撤去のボランティアに幾度か参加させて頂きましたが、被災者同士が

お互いさまで助け合っている姿が印象的に映りました。

新型コロナウイルス感染症の拡大によりボランティア活動さえもが市内在住の方以外お断りとなつてしまい、それ以来一度もお伺いできないでおります。互いに支え合う共助の理念を分断する恐ろしさもまた自然の脅威であると云えるでしょう。

他者の利益になる行いを優先することは、自らの不利益であり損をすると思う方もいるかもしれませんが、そうではありません。

## 利行は一法なり

道元禅師は「利行は一法なり、あまねく自他を利するなり」と示されます。「利行」とは、誰かのためになる行いの事です。

自分のことを忘れ、ただ一筋に



十牛図

他者の苦しみを取り除くために我が身を捧げる。その菩薩の行いを通して、実は自らも救われていると仏教では考えます。

誰かのためになる行いはボランティア活動に限った話では無いのですし、自らの心や身体を犠牲にしてまで行うものでもありません。

例えば、車を所有し運転できる

人ならば、車がなくて買い物に行けないご近所さんを一緒に買い物に誘ってあげることが出来ます。苦しい状況にあるときにこそ、人の幸せの為に行動を起こせる自身でありたいと願います。お釈迦様の願う世界は「共生」、共に支え合いながら生きることです。

※灰頭土面の出典は「十牛図・入塵垂手」だと言われております。「十牛図」とは中国から伝わる禅修行の手引書で、北宋時代の廓庵師遠禅師による十枚の図には、人間が本来持っている心の「仏性」を身近な家畜の牛にたとえて描かれており、その仏性の牛を探し求める牧童（牛飼い）である修行者と逃げ出したその牛との心の葛藤を物語るものです。

※仏画師安達原玄先生の遺作が富士見町瑞雲寺さま御本堂に安置されております。お近くの方は足を運んでみては如何でしょうか？

